

書評・白山芳太郎著『北畠親房の研究』(ぺりかん社、一九九一年刊)

下川 玲子

本書は、北畠親房研究の第一人者である白山芳太郎氏が、『季刊日本思想史』等に発表した論考を一冊の研究書にまとめたものである。著者はすでに『職原鈔の基礎的研究』(臨川書店、一九八〇年)を著わしており、本書はこれに続く親房研究の書である。以下では、まず本書の内容を要約して紹介し、次に近年の代表的な親房研究を概観する。最後に、本書が親房研究の歴史の中で占める位置を確認し、その意義と問題点を考察する。

一 本書の内容

本書の章や節はそれぞれ独立した論考であるから、章ないし節ごとに内容を要約するのが適切だろう。まず「第一章 北畠親房の思想的基盤」の「第一節 和歌にみる北畠親房の思想」で、著者は、親房が『神皇正統記』や『古今集註』等の著作で、後村上天皇や南朝の皇族に対して、為政者が和歌を学ぶ重要性

を説いたという事実に着目して、和歌を治政の手段と見なす発想が古代中国思想の詩道精神を継承したものであり、親房の思想基盤には儒教がある、と指摘する。「第二節 北畠親房の思想的基盤」は、親房の思想の核となっている神道を考察の対象とする。彼の神道思想の特徴は、それが伊勢神道の文献の信頼性の高い部分を継承しながらも、神の恩という独自の概念をそこに付け加えている点に求められるべきだ、と著者は論じる。

「第二章 北畠親房における歴史研究と官職研究」の「第一節 『神皇正統記』の歴史思想」では、著者は、『職原鈔』等に記載されている事項の細部を考察し、親房が上古や近代を重視しているという証拠を提示する。これによって、親房が中古を理想の時代と見なしたとする従来の説を批判するのである。著者によれば、中世の末世意識・下降史観を克服しようとする親房の歴史思想の特徴は、各時代の官職制度の良い部分を利用して現実の混乱を乗り切るといふ彼の関心の中にもっともよく

現われるのである。「第二節 『職原鈔』の内容と書名」の中心課題は、『職原鈔』の本来の書名を確定することである。著者は諸写本を検討することによって、『職原鈔』（あるいは『職原抄』）という通称や、ほかの『明職』『官位鈔』等の書名が、どれも後人の命名であることを証明し、この本が元来は書名をもたなかったと結論する（この書評は『職原鈔』に統一して記述する）。「第三節 北畠親房の撰政関白観」では、親房が、中古以降に常設された撰政関白という令外官の職を、藤原良房の子孫が独占するのを容認した理由が考察される。親房がそれを容認した理由は、乱世を乗り切るためには、中古以降に形成された譜第の家を重用し、官職制度を運営することが最良であると考えたからである。親房が、宇多・醍醐・村上の三代の盛時を、後宇多・後醍醐・後村上の南朝三代に重ね合わせて見ているという指摘は興味深い。

「第三章 北畠親房の神社研究」の「第一節 北畠親房の伊勢・熱田・三輪における敬神」によれば、親房は、伊勢で『類聚神祇本源』『瑚璉集』を書写し、熱田に関する『熱田本記』（現在は散逸）を執筆し、三輪で『大三輪神三社鎮座次第』を閲覽している。著者は、親房のこれらの神社に関する古典研究の精神を、「敬神勤王」と要約する。「第二節 『二十一社記』成立の意義」では、『二十一社記』（親房作）と『二十二社本縁』の本文比較がなされる。そこから著者は、『二十一社記』が複数の神社の故事を編集した最初の書であり、後村上天皇の神社行政指導のために執筆されたものと推定する。「第三節

『二十一社記』における伊勢神道の影響」で、著者は、伊勢神道の本質を①清浄②正直③元本元本を強調する点に見いだして、外宮を内宮に同格とする主張は、皇字論争中に付加された枝葉の問題にすぎないことを指摘する。さらに、親房は『二十一社記』や『神道正統記』において、伊勢神道の本質的部分を的確に取り入れた上で、独自の神恩思想を展開していると論じる。

「第四章 中世神道史における北畠親房の位置」の「第一節 中世神観の系譜と北畠親房の天照大神観」では、親房以前の伊勢の祭神をめぐる神観と、親房がそれを批判的に承けて展開した神観が論じられる。度会行忠は、皇字論争を契機に、外宮を内宮と同等とする主張を伊勢神道書に加筆した。他方、それに助力した度会家行は、古典の記述を重視し、ゆるやかな改作にとどめた。親房は、家行の学問的態度を継承し、外宮神を重んじる神観を批判し、伊勢本来の天照大神尊重の立場を採る。さらに彼は、天照大神を祭ることの意義を普遍化し、全国民に応用できるような神学思想をつくった。「第二節 北畠親房の思想と伊勢神道」は、親房の神道思想が、単に伊勢神道の本質的部分を継承しただけではなく、彼独自の思想的営為の成果を含むものであることを論じる。神国思想・天壤無窮の神勅による国家観・仏教に対する態度という三つの問題、あるいは外宮神尊重批判、神恩思想などといった問題について、親房は彼独自の見解を展開していることを指摘する。「第三節 中世神道史における北畠親房の位置」では、伊勢神道が、神道の本来性を

語った神道史上最初の思想大系であり、中世神道の中核的存在であったことが論じられる。しかし、伊勢神道の流布範囲は非常に狭かったので、その本質部分を吸収した親房が、当時の思想界に伊勢神道を広める役割を果たした事情が説明される。

最後に、「補論」中世宗教運動と伊勢神道発生」は、鎌倉新仏教の成立・旧仏教の改革運動という一連の動きとの関連において、伊勢神道の発生を説明する。著者は、伊勢神道の事実上の創始者である度会行忠を、新仏教の祖師や旧仏教改革者と並ぶ中世教祖のひとりとして扱う新たな視点を提示する。

二 近年における親房研究

戦前・戦後の代表的な親房研究のいくつかをここで取り上げておくことは、本書の意義を論じるために必要かつ有益であると思われる。

まず戦前の代表的研究として、山田孝雄による注釈書『神皇正統記述義』（民友社、一九三二年）を取り上げよう。この書の巻末では、『神皇正統記』の論理構成は次のように説明される。日本は神々が生んだ神国であり、日本の国体論と神道論とは一体の関係あり、神道論は神器論と関連する。さらに、神器論は一方で皇位継承論と関わり、他方では君徳論・政治論へと展開するという。山田は、親房が「国体学」に空前の境地を開拓したと解釈し、当時の国家神道の立場から親房の神道思想を理解し、明治以降の一君万民制との連想によって親房の理想とする

政治形態を天皇親政と断定する。つまり、山田の解釈は、戦前の天皇制国家のあり方を親房に投影しすぎるといふ難点をもっているのである。

そこで戦後の研究に目を移そう。社会経済史を専門とする水原慶二は、松本新八郎の研究を受け継いで、『神皇正統記』や『職原鈔』が東国武士に向けて官職や所領の要求に答えるために執筆されたと考えた（『慈円・北畠親房』日本の名著9、中央公論社、一九七一年）。水原らの主張は、戦前の解釈への批判を意図したものである。しかし、例えば皇統の正統に関する親房の見解について、水原は、それが（皇族という限定はつくにせよ）君徳者が皇位継承するという点で中国の放伐思想に近いものと解釈する。だが、実際に親房が正統と記載したのは神武から後村上までの直系天皇であり、この点では、むしろ戦前の万世一系解釈の方が親房自身の立場に近いと言えるのである。これからも明らかのように、水原の批判が妥当であるかどうかは、検討しなおす必要がある。ただし水原が、『神皇正統記』や『職原鈔』や結城親朝宛の書簡集などを、総合的に考察して親房像を明らかにする姿勢を示したことは重要である。

平田俊春による綿密な文献学的研究、『神皇正統記』の基礎的研究（雄山閣出版、一九七九年）を挙げておく必要がある。現代の研究者は、この研究を踏まえずしては、親房に言及することはできないからである。平田は、親房が戦陣の中で一冊の参考書もなく、『神皇正統記』を執筆したという通説を疑問視し、

その成立事情を入念な考証によって明らかにした。つまり親房は、神代の記述には『元元集』（従来偽作とされていたが、平田がこれを親房作であると証明した）、人代の記述には『皇代記』（現在は親房が参考にしたものは散逸しているが、平田はその復元を試みている）、そして正統論形成にあたっては『仏祖統記』を、それぞれ参照したというのである。

最後に、親房と宋学の関係を論じた我妻建治による研究、『神皇正統記論考』（吉川弘文館、一九八一年）にも触れておこう。我妻が明らかにしたのは、親房が「程子注」「朱子注」など、宋学の基礎をなす易哲学についての知識を豊富に有していたこと、『神皇正統記』には宋学が高く評価した『孟子』に基づく叙述が含まれていること、そして親房が讖緯説を批判していることなどである。これらの点から、我妻は、宋学が親房の思想形成に大きな影響を与えたことを結論づける。

三 本書の意義と問題点

以上で示した本書の要約と研究史概観を踏まえて、本書の意義と問題点をあわせて考えてみよう。

第一に、本書の意義は、平田の文献学的研究を継承し、親房の思想研究のための基礎作業を一段と進めた点にあると言えよう。著者は、前著『職原鈔の基礎的研究』においてと同様、本書でも諸著作の成立事情等を積極的に考察して、テキストの整備を推進している。本書の第二章二節での『職原鈔』の書名の考

証、三章二節での『二十一社記』と『二十二社本縁』の本文比較などがそれである。

第二に、本書は、『神皇正統記』のみではなく親房の諸著作から彼の思想を総合的に論じようとする研究である。もちろん、この種の研究は、永原が『職原鈔』や結城親朝宛て書簡について、あるいは平田が『元元集』についておこなってきた。しかし、本書は『二十一社記』・『東家秘伝』・『古今集註』などを視野に入れ、総合的研究を一層発展させている。この点と関連して、『神皇正統記』が誰に向けて書かれたかという論争についての著者の立場は興味深い。後村上天皇説と東国武士説とに分かれ未だに決着がつかないこの論争について、著者は、『古今集註』が後村上天皇のための和歌に関する政治学上の参考書であり（一八頁）、『二十一社記』が後村上天皇の神社行政の参考書と考え（一九頁）、後村上天皇説を支持する。このような見解の是非はともかく、親房の主要著作を後村上天皇の政策指導書として統一的に把握する本書の視点は、親房の総合的研究にとって貴重である。

第三に、本書は、先入観にとらわれず親房の論述や記述を丹念に調べあげ、正確な親房像を構築しようとしている。先に述べたように、戦前の山田による研究は、明治天皇制を投影して解釈する傾向をもっていた。他方、永原は戦前の研究を批判することを意識し、古代アジア的専制国家を武士団が解体して中世が成立したという社会経済史研究の成果を利用して、武士に放伐思想を説く親房像を描いた。これほど大きく異なる二つの

解釈が生まれたのは、山田が皇国史観に、永原が社会経済史による思想理解の方法に囚われてしまい、彼ら自身が描きたいと思っている親房像へと解釈を展開するあまり、親房の記述を詳細に検討することを怠ったからではないだろうか。著者は、そのような批判的視点をもつゆえに、親房の記述の細部を検討することによって真の親房像に迫り、戦前から戦後へと時代の変動に翻弄された親房研究を本来あるべき姿に戻そうとする。この著者の姿勢は評価してもよい。ただし本書の論述は、親房の叙述の細部にこだわるあまり、二章の一節や三節等では解釈上のささか不明瞭な点を残す結果となってしまう。細部の検討をもう一度再構成して、親房の論理をより原理的に把握する作業が必要だろう。

第四に、本書四章に見られる北畠親房と伊勢神道の関係の本格的考察は、著者独自の業績である。これまで、神道史研究の中に親房を位置づける研究はあったが、親房研究の中に神道史を取り込んだ研究は見られなかった。しかし、本書の伊勢神道解釈については、「伊勢神道の実体に対する著者の捉え方は、主観的・超歴史的であるように思われる」という佐藤真人の指摘があるので（『宗教研究』一九三三号掲載の本書の書評）、今後いっそう実証的で客観的な歴史学的視点から検討される必要がある。

第五に、著者は親房の思想の核心を神道と主張するが、すでに見たように、我妻は親房における儒学（とりわけ宋学）の影響の大きさを指摘する。親房に神道と儒学のどちらがより重大

な影響を及ぼしたかという問題は、今後さらに追究されるべきだろう。

最後に、著者の思想研究の方法に問題がないだろうか。本書は親房の思想が伊勢神道からどのような影響を受けたかという事実関係を追究するように、思想に対して主として歴史的・外在的なアプローチをとっている。確かに、そういう方法は思想を理解するうえで一定の重要な役割を果たす。しかし、思想の内容をより深く把握するためには、思想のもつ原理を抽出したり、その構造を明らかにする作業が不可欠だと思われる。例えば、近世思想史研究では、「自然法則」と「道徳規範」の相互関係を問うことによって朱子学の思想を解明する試みがなされている。親房研究においても、著者の外在的アプローチに加えて、なんらかの内在的アプローチがとられることが必要だろう。

（しかもかわりようこ 筑波大学大学院哲学思想研究科在学中）